

## 水城村のサルヅカ

公文書館ホームページのタイトルバナーには『郷土読本』という資料の画像を使っています。これは、昭和12年（1937）に水城尋常高等小学校が教材として作成したものです。前年、同校は福岡県の郷土教育研究指定校に選ばれており、『郷土読本』はその研究成果と言えるでしょう。この『郷土読本』には「サルヅカ」という昔話が収録されています。

水城村に住む夫婦の家で飼われている猿が、夫婦の留守中、見様見真似で赤ん坊を風呂に入れたところ、誤って熱湯につけて死なせてしまい、その罪を悔いて自害するという内容です。ところが、『郷土読本』の前年に刊行された『筑前の伝説』

（佐々木滋寛編、昭和11年）は、「猿塚」を岬村字鐘崎（現・宗像市）の伝説としており、伝説の典故として江戸時代の井原西鶴の奇談集『懷硯』を掲げています。佐々木滋寛には昭和7年にも『筑前伝説集』という著作があり、同じ「猿塚」を掲載していますが、こちらは太宰府町の伝説としています。佐々木は『懷硯』巻四「人真似は猿の

行水」という話を翻案するに当たり、なぜ一方は太宰府、一方は鐘崎の伝説としたのでしょうか。

『懷硯』では、物語の発端は太宰府の里と明確ですが、その後の舞台及び猿塚の所在については具体的な地名を記していません。そこで佐々木は『筑前伝説集』に採録する際、太宰府付近の「或る村」の話と仮定したものの、4年後の『筑前の伝説』編集時に再度『懷硯』を精読し、「鐘崎」の方が妥当と考え直したのではないのでしょうか。ともかくこの改訂により、太宰府の「猿塚」は鐘崎へと移動してしまったのです。

『郷土読本』の担当者は、昭和7年の『筑前伝説集』の方を参照し、太宰府の伝説とされていたからこそ「猿塚」を採用したと推測されます。『郷土読本』への収録に際し「或る村」の部分に「水城村」を当てはめ、小学1年生の読み物としてふさわしい内容へと編集し、郷土教育教材としての「サルヅカ」を誕生させたと考えられるのです。



# 古代大宰府の軍事的機能(3) 防人制再論

以前、この欄で古代大宰府の軍事的機能として防人さきもりを取り上げました(令和4年12月1日号)。現在、わたくしは防人制の問題をまとめてみたいと考えて、その研究などを整理しています。その過程で気づいたことを述べてみましょう。

最近の古代軍制史研究の動向を振り返ってみると、防人制に関する研究は必ずしも盛んであるとはいえません。『万葉集』巻20には、天平勝宝7(755)

年2月、編者の一人と目されている大伴家持が兵部少輔として、東国から筑紫に派遣される防人たちの検校にあたって、彼らの歌をとりまとめ、その一部を収録した部分があります。いわゆる「防人歌群」と呼ばれるもので、防人制を考えるうえでも重要な史料です。しかし、それに関する研究も近年は国文学からのアプローチが主流を占めており、防人制そのものに関わるものではないと思われます。

しかし、防人制は天智朝頃に成立したと推測されますが、その淵源が中国や朝鮮半島におけるどのような制度にあるのか、あるいは

関連はないのかについても、それほど明確になっていくわけではありません。また、防人制の成立は、律令国家軍制の根幹であった軍団兵士制の成立に先行する可能性が高く、のちにはその軍団兵士制の一環に組み込まれていくことになります。



防人そのものは、西辺防備のための兵力であり、具体的にいえば北部九州を中心に配備されたのではないかと考えられます。ただ一方で、先にふれた『万葉集』の事例にみられるように、本来的にはその出身地は東国でした。東国は、その北方にいた蝦夷の征討に兵力を割く必要もあり、そのことが、防人の東国からの派遣が、九州

での現地調達へと変化していくことに対応しているという説があり、これはきわめて説得的です。

以上のように考えてくると、防人制は単に北部九州という一地域の兵制にとどまらず、日本古代軍制、また軍事政策の一環として捉えるべきことを示していると思います。

# あまのとおかげ 天野遠景と大宰府

げんりやく  
元暦2（1185）年、源頼朝は壇ノ浦の戦いにて平氏を滅ぼし、九州の統治に乗り出しました。九州は長らく平氏の重要な勢力基盤であり、滅亡後は頼朝と対立した弟の義経が、後白河法皇から九カ国の地頭に任ぜられたようです。頼朝率いる鎌倉幕府にとつて、早急に勢力を確立する必要があるました。

そこで、頼朝の側近天野遠景が同年の末頃に九州に派遣されました。この天野遠景については以前に一度、「太宰府人物志 資料室だより」（広報だざいふ平成25年2月号）で詳しく紹介済みですが、あらためて多少の付け加えをして取り上げたいと思います。



遠景は「鎮西奉行人」「鎮西守護人」等と呼ばれ、九州における幕府の出先機関としての役割を果たします。その主な任務は頼朝の指示を受けて、御家人（頼朝と主従関係を結んでいる者）の動員・統率、領地の承認や御家人同士の争いの裁定、御家人による荘園への狼藉の取り締まりなどを実施することでした。このような職務を

果たすために、遠景は既存の行政機関である大宰府を利用しています。

ご存じの通り大宰府は、九州全域の統括と海外との交渉のために朝廷が設置した地方官庁です。関東からやって来た遠景は、この大宰府を掌握することによって現地の行政機能を手に入れたと考えられています。では具体的にはどのようなにして掌握していたのか、研究者の間でも意見が分かるところです。

ここで遠景が出した文書を見てみると、頼朝が出した文書を受けて、その内容を遠景が九州で実行する際に出したものが数点伝えられています。これは遠景が単独ではなく、府官（大宰府の役人）2人と連名で出している点が注目されます。つまり、遠景は独力ではなく実務能力のある府官たちの協力を得ることによって、頼朝からの命令を実行できていたと言えるでしょう。このような方法は、続いて来住する武藤氏（少貳氏）に影響を与えていくことになりました。

# 天満宮安楽寺と筑後国水田荘

中世の太宰府天満宮は、天満宮安楽寺と呼ばれていました。天満宮安楽寺は一般的な大寺社と同じく、荘園領主としての性格を持っていた。安楽寺領の荘園は、太宰府が位置する筑前国に限らず、北部九州一帯に点在していました。

その中のひとつが、筑後国水田荘（現・福岡県筑後市）です。水田荘は、13世紀末には史料上に名前が現れます。水田荘の大きな特徴は、安楽寺の現地における事実上のトップであった留守職を代々務めた家のひとつである大鳥居氏が、水田荘、中でも南嶋村（本村とも）を中核的な所領としていたことです。さらに、大鳥居氏は

は南北朝時代以降、水田荘内に在住するようになったとされています。大鳥居氏と水田荘の結びつきは、きわめて強いものであったといえるでしょう。

ところで大鳥居氏は、留守職をめぐり、大鳥居氏内部や、小鳥居氏などの他の社家と対立を繰り返していました。水田荘は、こうした対立の中で頻繁に登場します。



14世紀末、大鳥居氏の祖である大鳥居信高が亡くなって以降、信高の息子たちの間で、継承者の地位をめぐる対立が起こっていたことを、徳永健太郎氏が明らかにしています。最終的に、信高の孫である亀松丸（後の信栄）が水田荘南嶋村などの信高遺領を相続しますが、亀松丸を支援したのは、当時の室町幕府九州探題・今川了俊でした。徳永氏の研究によると、了俊は、安楽寺を統括していた京都の菅原氏を協力させる形で、他の社家を排除して亀松丸を支援し、安楽寺への介入を強めたようです。

その過程で、康暦2（1380）年秋ごろに、了俊が菅原氏に対して、亀松丸が水田荘南嶋村の管理権を剥奪されたことを抗議したとみられる書状が残されています。この中で、水田荘の領有が問題になったこと自体が、大鳥居氏にとつての水田荘の重要性をうかがわせます。これ以降、水田荘と安楽寺をめぐる情勢に、武家権力が徐々に介入を強めていくのです。

# 中川家文書「横岳遺跡展観図録」よこだけいせきてんかんずろく

横岳山おうぐくえん崇福寺といえは福岡市博多区にあり、福岡藩主黒田家の菩提寺として有名ですが、もともとは山号の通り、太宰府の横岳よこだけに開かれた臨済宗の寺院でした。禅宗文化の中心的役割を担い、大いに発展しましたが、天正14（1586）年に起こった岩屋城攻めで建物のほとんどを焼失します。その後崇福寺は、黒田長政によって博多の地に再建され、横岳の旧跡は「いと閑寂なる境区」（貝原益軒『筑前国続風土記』）として、ひっそりとその存在を保ってきました。しかし明治に入り、廃仏毀釈あひの煽りを受けて崇福寺は廃寺となり、横岳の旧跡も「故ありて他の所有に帰し開山の墳墓さへ荆棘けいせきの中に埋もれたり」（「福岡日日新聞」）と荒廃の一途をたどります。明治28年（1895）崇福寺に復興の動きがあり、横岳でも若松の資産家杉山松太郎が私財を投じ、地元では吉嗣拝山らも奔走して、旧跡地を買い戻し、崇福寺へ寄進したのでした。明治29年12月5日、崇福寺は横岳の旧跡地で「遺跡復旧式」を挙行します。記録では、僧侶数



十名による読経が行われるなど、盛大な式だったようです。式の後は、拝山らが発起人となり、威徳寺（現・光明禅寺）で、崇福寺にまつわる古書画の展観会が開催されました。茶席や酒肴の振舞いなども行われ、こちらも盛会だったようです。

公文書館所蔵中川家文書の「横岳遺跡展観図録」はこの展観会の図録です。萱島秀山かやしましゅうざんの題字、藤瀬冠邨ふせ かんそん模写の大応国師像、木村耕巖の横岳山略図、守田洞山しゅてん とうざん・萱島秀山による茶席図、禅宗関係各位からの祝辞、吉嗣拝山も漢詩文や書を寄稿するなど、横岳遺跡をめぐる同好会の会誌のようでもあり、楽しくも見ごたえのある1冊です。図録を保存していたのは太宰府の医師中川輓太郎なかつわだたろう。彼の詩も「図録」に掲載されています。福岡医学学校で学んだ明治の青年医師も、近世以来の医家の出らしく、幼少期から漢詩文の薫陶くんとうを受けていたので、堂々たる一首を献じています。

# 幕府監察・小林甚六郎の太宰府詣と五卿

こばやし じんろくろう

慶応元（1865）年正月、京都を追われた三条美ら急進派の公卿5人が太宰府へやって来ます（五卿落ち）、その翌年、幕府は太宰府天満宮に滞在中の五卿を大阪へ拘引する目的で目付小林甚六郎を派遣しました。この時期はちょうど、元治元（1864）年の禁門の変で「朝敵」と見做された長州藩の2回目の追討が行われる前後に当たり、別手組ら警備の者を含め総勢80人で博多に上陸した小林甚六郎は、3月末にその内19人を引き連れて二日市に入り「送迎解釈紀事」「延寿王院御用日記」、しばらくはそこで五卿送還実行の機会を窺うことになりました。



り込まれ、また大砲3台を曳いた大山綱良ら鹿児島<sup>おきな</sup>の壮士100人による連日の北谷での発砲という威嚇にさらされ、小林は自身の使命がいかに厄介なものを思い知らされます（『尾崎三良自叙略伝』『回天実記』）。小林らはいったん博多に戻り、福岡藩主による慰労の饗応で愚痴をこぼすしかありませんでした（『送迎解釈紀事』）。

小林がようやく五卿と面会できたのは8月17日で、6月に始まった長州再征が幕府側の失敗に終わった後のこと。小林は五卿の復官周旋を約束した上で臨みます。朝9時に二日市を発った小林一行は途中「新町の瓦屋」で休憩を挟み、昼過ぎ頃太宰府天満宮へ到着、初めて五卿との面会を果たしました（『幕吏小林甚六郎来宰日記』）。

4月1日、小林甚六郎は二日市から太宰府へ入り、検校坊において福岡・久留米・佐賀・熊本・鹿児島五藩の五卿警備担当者らと面談しますが、想定より遙かに小林の任務遂行は難しく、五卿との対面すら許されずに天満宮参詣だけでこの日は二日市へ戻りました。その4日後、小林は黒田清綱率いる鹿児島藩の兵児組30人に抜刀せんばかりの勢いで逗留先に乗

五卿を正義と見る後の歴史では、小林は顔色を無くして逃げ帰った悪役として語られますが、京阪方面の情報収集が主な目的とはいえ、帰路、大阪までの守護を兼ねた同行の申し出が五藩からあったのは（『来宰日記』）、彼への同情を含めた配慮かと想像します。

## 古代大宰府の所司<sup>しよし</sup>

ここにいる所司を、私は「大宰府部内にそれぞれの庶務を担うべく形成された分課的な部署」と定義しています。それらが〇〇司、△△所などのように呼ばれていたのです。たとえていえば市役所の中の総務課、税務課、財政課などのようなもの、といえればわかりやすいでしょうか。史料上では、主神司、防人司などをはじめとして26の所司を確認することができます。

私は、昨年3月に刊行された機関誌『太宰府市公文書館紀要―年報太宰府学』第17号に「大宰府所司の形成過程とその運営体制」という論文を発表しました。ここではその論文で考えたことをもとに、少し述べてみたいと思います。

ポイントの一つは、それらの所司の成り立ちを（A）四等官系、（B）品官系、（C）大宰府機能・職掌分掌系の3つにわけて考えてみたことです。（A）は大宰帥以下の四等官に直接つながるとみられる所司で、政所、公文所、大帳所の3所をあげています。また（B）は、養老職員令大宰府条に

規定された品官を母体とするもの、（C）は同じく大宰府条に規定された大宰帥や品官のもつ職務内容の一部を継承する形でできた所司と考えています。

もう一つのポイントは、それらの成り立ちを基礎にしながら、これまであまり言及されていなかったそれぞれの所司の運営体制のあり方にもふみこんでみたことです。

～公文書館だより⑩～



一般に、こうした所司の運営には、大宰監・典といった四等官のうちの第三等官・第四等官が関わっていたとされてきましたが、ことに（B）の所司と（C）のそれとはその関わり方が相違するのではないかと考えてみたのです。こうした検討を積み重ねていくことで、古代大宰府の姿を少しずつ明らかにしていきたいと考えています。

これを読んで関心をもった人には、機関誌（図書館で閲覧できます）を手にとって一読してもらえればと思います。

太宰府市公文書館 重松 敏彦<sup>しんごう たけひこ</sup>

## あまのとおかげ 天野遠景の解任

本紙の昨年9月号で紹介した通り、天野遠景は源頼朝によって九州に派遣され、「鎮西奉行人」などと呼ばれ、頼朝の命令を現地で行う出先機関としての役割を果たしていました。またそのために実務能力のある大宰府の役人の協力を得ていました。ここでは続いて、遠景がその後どうなったのかを取り上げたいと思います。

結末から言うと、遠景は建久5（1194）年頃までに解任され、関東に帰っています。それまでの間にどんなことが起きていたのか、紹介していきます。

文治2（1186）年の6月、遠景は筑後国瀬高庄（現みやま市・柳川市）に非法を働き年貢を差し押さえたとして、領主の徳大寺実定から鎌倉幕府に訴えられました。これに対し頼朝は、速やかに止めるよう指示しています。

文治3（1187）年の9月には、遠景が無実の罪を言い立てて島津庄（現鹿児島県・宮崎県）に使者を送り込んだと幕府に訴えられており、頼朝は今後遠景の使者が島津庄に入部することを禁止し



ました。またその前後と見られる5月に、島津庄に漂着した唐船とその積荷を大宰府の役人が強引に奪う事件が起き、領主の近衛家が幕府に訴えています。頼朝は遠景に元に戻すよう指示しており、恐らく遠景もこの件に関わっていたと思われます。

続いて遠景が九州を去った後の嘉禄元（1225）年12月には、かつて遠景が宇佐宮（現大分県宇佐市）造営費捻出のための税を九州管内の庄園や寺社に対し、新たに均一に賦課したことが記されています。そのため以前は免除されていた宗像社（現宗像市）は、その領主である八条院（鳥羽天皇の皇女）が天皇に訴えて、あらためて免除されたそうです。

このように遠景は、庄園領主である京都の貴族たちと何度も衝突し、幕府に訴えられていました。これは遠景の施政に対し貴族らが激しく抵抗したことを意味し、遠景解任の原因の一つになったと考えられています。

# 筑後国の太宰府天満宮領と菊池氏

本紙昨年10月号では、南北朝時代の天満宮留守職（天満宮の現地でのトップ）大鳥居氏と今川了俊の関係を紹介しました。続いて今回は、室町時代の大鳥居氏と、肥後国（現・熊本県）・筑後国（現・福岡県南部）の守護（国ごとの統治担当者）を務めた菊池氏との関係を紹介していきます。近年、菊池氏は肥後北部と筑後南部にまたがる守護として再評価されています。天満宮関連の中文書からは、筑後国の天満宮領を舞台とした、菊池氏と大鳥居氏の関係をうかがうことができます。



ます。当時、菊池氏は筑後国内において、新たに九州探題（室町幕府の九州統括担当者）となった渋川氏を相手に戦闘状態となりました。右に挙げた武朝の命令は、そうした混乱に対応したものと思われまふ。この時点で菊池氏が正式な筑後守護であったと断定できる材料はないものの、菊池氏と天満宮との関係が形成されつつあったことがうかがえます。

ところで、50年ほど後の文安年間（1444～1494年）には、もともと大鳥居氏の領地であった筑後国山門郡得飯莊（現・みやま市高田町飯江）の一部が、菊池氏の有力家臣であった阿佐古氏の領地となりました。この頃には、菊池氏の筑後への影響力と、大鳥居氏や天満宮との関係がさらに深まっていたと推定できるでしょう。一見すると太宰府と関係ないように見える室町時代の菊池氏ですが、莊園を通じて、太宰府とつながっていたのです。

## 父からの手紙

### —中川昌沢書状— ながかわしょうたく

4月から進学や就職のため実家を離れる人も多いでしょう。子どもの初めて一人暮らしとなると、送り出す親としては心配も一入ひとしほと思います。それは今も昔も変わらないようです。

公文書館が所蔵する中川家文書に、江戸時代末期、親元を離れて住込みの修業を送る息子に宛てた父親の手紙がまとまって残っています。

差出人の中川昌沢は、太宰府で医師として活躍した人物です。村内の産子養育や天満宮社家中の種痘も担当するなど、太宰府の地域医療に力を注ぎました。中川家は3代続いた医家で、昌沢けいざが4代目、昌沢の息子啓甫けいふも医師になるための修業を始めます。住込み先は、福岡城下の通り丁ちやうてい（現在の福岡市中央区大濠公園あたり）にある福岡藩医の岸原養元家。現在でこそ電車や地下鉄を乗り継いで1時間もかからない距離ですが、当時の移動は徒歩であり、さらに修業中ともなればそう頻繁に帰省もできません。そこで、近況伺いや用事、相談ごとには手紙を用いました。もちろん郵便制度がない時代のこと、博多方面へ所用で行く人に預



け、急ぎ返信が欲しい時にはわざわざ人を送って手紙のやり取りをしました。そうした手間を惜しまず、父・昌沢は修業先で一人頑張っている息子に、たいそう細やかな手紙を送っています。

例えば、夏用の衣服を送ってやっていた時には「着古した着物はこちらへ送り返しなさい」、修業先に渡すための品物を送った時には「きちんとお礼を言ってお渡ししなさい」など、一言書き添えることを忘れません。特に用事がない時も、「お母さんが手紙を寄こすように言っています」「弟が本を持ち帰って欲しいそうですよ」など、家族の気持ちを筆にのせて、息子のもとへ届けました。時には医師として、藩医の元にいる息子に薬や専門書の入手の仲介を頼み、修業についてのアドバイスを送ることもありました。父であり、医師の先輩でもある昌沢からの手紙は、啓甫にとつてうれしくも心強くもあつたでしょう。20通余りの手紙が現在まで大切に残されていることが、息子の気持ちをよく表しているようです。